



何年か前、一度機関誌「神経化学」に自己紹介を寄稿したことがあります。当然そこでは、私自身の研究を紹介したと記憶しています。本学会の監事に就いたのは、実験科学から引退して間もない時でした。それは、神経化学とはかなり離れた領域での、しかも実験研究とは縁のない職に就いて直の頃でしたので、毎年の神経化学学会大会に出席する機会も少なくなると思いましたが、30年近くに渡ってお世話になった神経化学学会に僅かでもご恩返しできるならと考え、監事をお引き受けしました。今は既に5年近く、論文でも学会でも現役の皆さんにお会いする機会が無い私ですから、研究を通して「神経化学学会」を考えることは無くなりましたが、現役の研究者とは一歩離れた視点から「学会」又は「研究」を考える貴重な機会になりました。

そうして感じたことの一つをお話して、会員の皆様へのメッセージにいたします。

実験研究から離れて最初に感じたことは、24時間中、頭から実験や論文のことが離れなかった現役時代に比べ、全く他のことを考える時間ができたことでした。その時間があることで得られる何か解き放された感覚は、新鮮な驚きでもありました。ところが、もっと驚いたことに、そういう感覚の中で、現役時代に解釈できなかった実験データに、一つの解釈を見つけることができたのです。“現役の間にこの解釈にたどり着いていたら、もう一報論文に出来たかもしれない”という思いと共に、24時間中研究を考えていた時間を懐かしみました。しかし同時に、頭を空にする“隙間の時間”が柔軟な発想を生むことに気付きました。考えてみれば、神経化学学会大会での厳しい質疑応答やテニス大会は、そんな隙間に近い時間だったでしょうか。学会のそういう“隙間の時間”が研究の役に立つこともあるのでは、と思うのです。

内閣府食品安全委員会事務局・技術参与（元上智大学教授）

熊倉鴻之助